

# 教えて！！漢方&鍼灸「漢方と『糖尿病』（前編）」

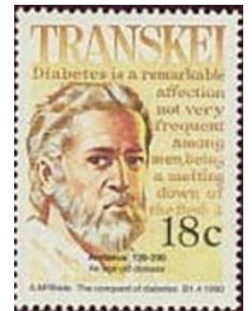
附属東洋医学研究所  
助教 宮川亨平

## 教えて！！漢方&鍼灸 ～漢方と「糖尿病」（前編）～

糖尿病は近年日本のみならず世界的に増加傾向が続き、日本国内では予備軍を含めるとその罹患人数は2,000万人に達するといわれ、日本政府により重要疾患の1つとして位置づけられています。この糖尿病はいわゆる「生活習慣病」の中では比較的自覚症状が出現する例が多く、洋の東西を問わず古くからその疾患概念が種々の記録に記述されていることが知られています。

糖尿病と思われる疾患に言及した最古の記録としては、紀元前1500年頃に記されたエジプトの『エーベルス・パピルス』に記載された内容が知られています。この記録は疾患概念の記載に留まりますが、1世紀のカッパドキアの医師アレテウスは同様の疾患に対してギリシャ語で「水が流れる様」を表す“diabetes”と名付けています。

中国医学でも、最古の医学書とされている『黄帝内経』で「消渴」という名前で糖尿病とされる疾患の記載が見られ、これに続く後漢代2世紀頃に成立した『金匱要略』でも同様に「消渴」の病名が確認されています。この『黄帝内経』では「此肥美之所発也、此人数食甘美而多肥也。肥者令人内熱、（中略）転為消渴」（「奇病編」より）とある通り肥満・美食を「消渴」の原因として挙げており、生活習慣病であることに対する言及があります。



ただし、この段階での疾患概念はいずれも口渴と多飲、それに伴う多尿を主としたもので、当然ながらその原因である血糖の存在までは言及されていません。そのため、同等の病態を来す尿崩症と同一の疾患として理解されていたようです。西洋医学では、17世紀になりイギリスのトーマス・ウィリスによりdiabetes患者の尿が甘いことが確認されたことを契機にmellitus（蜜）の言葉が足され、今日知られる“diabetes mellitus”の名前が提唱されました。これに伴い“diabetes insipidus”、すなわち「尿が甘くないが利尿を来す」尿崩症が分割されたとされています。



これに対し中国医学では唐代に王焘によって記された『外台秘要』（752年撰）に「渴而飲水多、小便数、無脂似麩片甜者皆是消渴病也」（口が渴いて水を多く飲み、小便が多くて脂がなくて麩片のように甘い者は消渴である）とあり、ウィリスよりさかのぼること900年近く昔に尿糖の存在について言及されていることが分かります。

さらにさかのぼること150年ほどの『諸病源候論』（610年撰）には「其久病変成癰疽」（消渴が続くと癰疽を併発しやすくなる）との記述があり、糖尿病に伴う易感染性について言及があります。同時期の『千金方』（7世紀中頃撰）では「凡消渴病經百日以上者、不得灸刺。灸刺則於瘡上漏膿水不歇、遂成癰疽」とあり、消渴が長引く患者に鍼灸治療を行うと施術痕が感染を起こして膿んでしまうことが書かれています。

このように古来からその病態の多くが知られていた糖尿病ですが、この時期にどのような治療が行われていたのかは気になるところです。これについては次回に話を譲ろうかと思えます。



11月号は「漢方と『糖尿病』（中編）」です。

